

巻頭言

研究所理事長に就任して —ひと、コト、協同を結ぶ「接着剤」に—

北川 太一（本研究所理事長 摂南大学）

このたび、くらしと協同の研究所の理事長を務めることになりました。正直、理事長に就くのは思いもかけないことでしたが、精一杯取り組む所存です。どうかよろしくお願い申し上げます。

いつの頃からか研究所と関わり始めた私ですが、調査や自主研究会、理事や運営委員など研究所の活動を通して、専門分野が異なる多くの方たちと議論できたことは、ややもすると視野が狭くなりがちな研究姿勢を正すことにつながりました。同時に、実際に現場を訪れて、生協をはじめ日々奮闘しておられる方々のお話を聴くことは、現場の課題から論理を組み立てるという思考を身に着ける一助となり、こうした研究所での経験は、私にとって研究や教育に携わるうえでかけがえのない財産になっています。

言うまでもなく研究所は、研究者と実践家など多様な人たちの集まりです。研究所の活動を通じて、一人の力ではできないことが実現できる、研究の糸口が見つかる、実践・運動の課題や方向性が見えてくることが重要です。こうした研究所の役割を発揮するためには、さまざまな人たちが集う場を創ることが重要です。

一昨年、若林前理事長を中心に、『研究所 30 年史』をまとめる機会がありました。この作業を通して、改めて研究所が時代に応じた多彩なテーマを取り上げ、数多くの研究会を設けて、ぶれることなく議論を積み重ねてきたことを実感しました。そこに集まるメンバーも、さまざまな専門領域を

持つ研究者と生協をはじめとする実践家から構成されており、このことが研究所の大きな強みであるといえます。

これからの研究所は、30 年余の蓄積を大切にしつつ、新しい風も取り入れながら、研究と実践、異なる専門性を有する研究者どうし、生協と生協、地域と地域、さまざまな協同組合・協同組織を結ぶ「接着剤」としての役割が求められています。そのためには、世代を超えた多様な人たちが集まり、交流することが重要です。とくに、これからの研究所の運営を担う中堅・若手研究者の拠りどころを創ること、協同の大切さや面白さを実感してもらうための企画・研究活動を行うとともに、生協の組合員、中堅・若手職員との交流も継続的に進めていく必要があります。

研究所は設立 30 年以上が経過して新しい時代へのスタートを切ったところです。経済の不安定化や暮らしへの不安が広がるなかで、本年（2025 年）、国連が 2012 年に続いて国際協同組合年と定めたように、協同組合への注目・期待が高まっていることも事実です。より多くの人に協同組合の社会的役割をアピールし、類似の研究機関との連携も進めながら、協同することの大切さを伝えていくこと。次代を担う人たちの参画の場を作りながら、未来への糧（たすき）を繋いでいかなければなりません。

皆さまのご理解とご協力の程、どうかよろしくお願い申し上げます。